



ピッポ新聞

2004

12

No. 194

子どもの本専門店

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

ピッポ

〒424-0886 静岡市清水草薙1-6-3

TEL & FAX 0543-45-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>

Email pippo@diana.dti.ne.jp

夕刊の見出しを見て

11月22日の静岡新聞夕刊の「読書県しずおか推進」という見出しがちょっと気になりました。

記事を読むと、この見出しは、県下の市町村の図書館関係者と読み聞かせボランティア900人が集う図書館大会で、県の教育長が挨拶の中で「関係者が一丸となって、読書県しずおかづくりをすすめてほしい」というところからきたようです。気になった理由は、県民の読書の推進(?) などというものを、県(御上=権力)が号令を掛けてやることなのだろうかという疑問をもったからです。

読書をする、しないなどということは、個人の自由の範疇であって、「さあー、みなさん本をよみましょう」などと、御上のかけ声のもとにやるものでは絶対にはないとぼくは考えます。例えばそれが子どもであったとしてもです! もっとも「読書推進」などと、おとなに声をかけたところで、誰も相手をする人はありません。が、これが学校というところだと事情は違ってくるのですね。

ちよと話が横道にそれますが、ぼくは思うのですが、現在学校という機関は、この国の中では、御上の方針が無批判に一番伝わりやすい場所(上意下達)になっているのではないのでしょうか。ですから、あえて言わせて貰えば、絶えず子どもに接している先生は、その一番末端の伝達者だということになるわけです。子どもは

「そんなの、おらーいやだ!」とは言えませんが、子どもへの「読書のすすめ」は、ほとんどの先生や親が良いことだと思っっているわけですから、反対などと言い出せる雰囲気ではないでしょうね。

ここでぼくの頭をかすめるのは、最近読んだ『安心のファシズム―支配されたがる人びと―』(斎藤貴男・著 岩波新書)という本の中で、ファシズムとは、過去も現在も誰の目にもわかるように「これがファシズムだ」というかたちをとることはなく、気付くと、だれも反対できない雰囲気になっていくものだと言っていて、いましつた。それが「読書推進」などという事柄のうちには良いのですが……。

さて、

教育長が前県立図書館長であったことをおもえば、「本あるいは読書というものを充分認識したうえの発言であることは確かなことだともいえます。それに、教育長とは個人的にも面識もあり、以前図書館長のとき、店に立ち寄ったおり、子どもの本のことや読み聞かせのことなどを話したことを思い返しても、子どもの読書にたいする理解の深さや思いの強さは疑いようもありません。ぼくもとても共感しました。

しかし、その発言が県の教育のトップという立場で発言したときは、本人の思いとは異なった様相を帯びてしまうものではないのでしょうか。ともすると、こういうことは「読書県しずおか推進」というスローガンだけが一人歩きして、

最初の考えとは違ったものになりがちです。ぼくはそのことに危惧を抱くのです。

その良い例があるじゃありませんか。先頃、園遊会のおり、招待された将棋の米長氏が天皇へ「わたしの仕事は全国の学

校へ国旗・国歌を揚げさせ歌わせることです」と言ったことへの天皇の「そういうことは余り強制でないほうが・・・」という発言が大きくとりあげられました。このことほど、どちらが物事を冷静に正しく見ているかが明らかだったことはありません。

ところで、これを受けて、「国旗・国歌」を学校現場に強力に強制してきた石原都知事がいま一番やらなければならないことは、これらに従わなかったという理由で教職員に処分を下した都の教育委員会幹部を処分して、自らは恥じて退場することだとぼくは思います。・・・。

閑話休題

ぼくが危惧する理由の一つは、とかく学校というところは何か取り組めば、目に見えた成果というものが求められるものらしいということ。読書」についても成果(?)を求められるようです。

ところが、本来「読書」という行為は、目に見えた成果などというものとは無縁な存在なのです。これも新聞紙上で読んだのですが、「朝読」の推進によって、「子どもたちが安定してきた」だとか、「本好きが目に見えて増えた」・・・等々とその成果が語られていました。ぼくはこうい

事は眉唾だと思つて読みます。

店に来るお母さんたちを通して聞く、学校における子どもたちへの「読書のすすめ」(読書指導というらしい)には噴飯ものの話が結構あるのです。

「読書貯金」というの聞いたときには最初のことかわからなかったのですが、その内容を聞くにおよんでびっくり返りそうになりました。どういふことかというところ、読んだページ数を記録して、何頁読んだかをクラスで競わせるというものだったので、もちろんこの場合、たくさんページを読んだ子が評価されるのです。

ぼくはこれを聞いて、この先生は「お勉強」はしてきたのかもしれないが、読書など余りしてこなかったのだとおもいました。自身が読書の楽しみを体験してきていたら、こんなばかばかしいことを子どもにやらせるはずありませんものね。

それに、子どもに平気で読書感想文を書かせる先生も、あまり読書の楽しみを経験したことがなかったのかも知れません。ぼくはお母さんたちに冗談半分に、こんな先生には、まずお手本に感想文を書いて貰い、それを子どもとおかあさんが評価したらと言っているのです。

読書とはほかの子と冊数を競うことでもないし、感想を求めるものでもありません。本を何冊読んだところで、余り意味のない読書もあるだろうし(これだって、本人が楽しければ良いのです)、たとえ読んだ冊数が少なくなつて、その子にとつては人生を左右するような本との出会いだつてある

のです。しかも、そんな本との出会いも、読んだときにそういう本だと認識できることより、ずっと後になつてそれと気付くことの方が多いのかもしれない。

ぼくは、学校で「読書のすすめ」をやるなというのを言っているのではありません。それどころか、どんなやつていただきたいと思つています。ぼく自身が「本好き」になつたのも、中学のとき、先生が読んでくれた本がともおもしろかつたということが切っ掛けでした。

問題はそのやり方だと思います。その先生はその本を、さりげなく読み始め、さりげなく読み終えるだけで、生徒に感想など一言も求めませんでした。しかもその長編の本の読み聞かせは完結しなかつたのですが、そのときの「ワクワク、ドキドキ」感が、ぼくを本の世界に導いてくれたのです。

この体験から言えるのですが、子どもを本好きにするのは、ただ本を読んでやるだけではないのだと思います。

身近な人が(学校では先生、家庭では家族、幼稚園・保育園では保育者)、自分が読んで面白かつた本を読んでやるのがベストだと思ひます。「この場合、何が書いてあつた」だとか、「どんなことを感じた」などいつさい聞かないことです。さりげなく読み、さりげなく読み終える、なにもたさない、なにもひかない!これですよ。

さて、もし、県の教育長がぐだんの図書

館大会で「司書のみなさん、自らの質を高めるために頑張ってください。わたしも公立図書館や小・中学校図書館に子どもの本の専門の司書を置くための予算確保にがんばります。これこそが本好きな子を増やす一番の近道なのですから」と、挨拶したと聞いたならば、ぼくは「さっすが!」と言って拍手喝采だたのにね・・・。

ねえー この本読んだ?

『ガンバレ!まけるな!ナメクジくん』
(三輪一雄・作 1050円 偕成社)
「ナメクジ」と聞くと眉をひそめる人が多いでしょう。では、でんでん虫はどうでしょう? 結構、幼稚園などで飼っているのを見かけますから、こちらは人気があるようです。



でもね、この二つは兄弟で、もしかしたらナメクジのほうか、でんでん虫より進化した(?)ものかもしれないよ。この絵本を読むときらわれもののナメクジについていろいろ知ることが出来ます。きつと、この絵本を読んだあとでは、「ガンバレ!まけるな!ナメクジくん」って声を掛けたくなるよ!

『しもばしら』 (野坂勇作・作 880円 福音館書店)

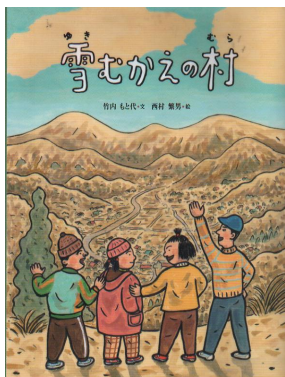


かがくのとも傑作集 最近しもばしらを見るのが少なくなつたと思いませんか。

豪快にできた霜柱の上を、踏んで歩く快感を懐かしく思い出しました。この絵本は霜柱がどうしてできるかをわかりやすく説明してくれます。

地球温暖化のせいかしら? それともほんどの道が舗装されてしまつたためかしら? 冬の朝、登校途中で土を押し上げて

『雪むかえの村』 (竹内もと代・文 西村繁男・絵 1470円 アリス館)
ナナちゃんは都会から、一人暮らしのおばあちゃんと暮らすため両親と一緒に両親の故郷に越してきました。



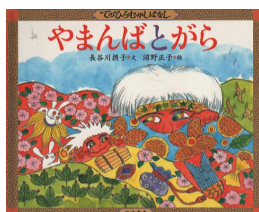
その村は冬はとてもたくさん雪が積もるのです。寒がりのナナちゃんはどうも村

になじめません。ある夜友だちが「おおゆきんさい、いこう」と迎えにきます。いやいや外に出ると、村のあちこちから子

どもたちの歌う声が

聞こえてきます「ながくる おうゆき こうこう こうゆき おおゆき こうこう」ナナちゃんも次第にひきこまれていきます・・・。その年初めて迎える雪のための素朴なお祭りを背景に都会育ちのナナちゃんが村に馴染む様子が描かれている。

『やまんばとがら』 (長谷川慎子・文 沼野正子・絵 798円 岩波書店)



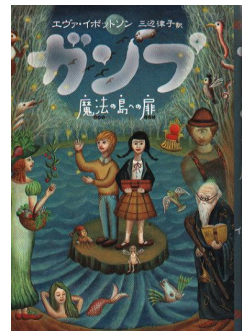
やまんばのお話はたいがいこわい話や、人間に悪さをするというのが多いのですが、このやまんばは村人に良いことをもたらしてくれるのです。もちろんやまんばですから超人的な力もつていることもたしかなのですが、その力をよいことにつかうお話です。

この絵本はてのひらむかしばなしのシリーズの1冊ですが、今回ほかに「十二支のはじまり」(山口マオ・絵)「だんだんのみ」(福知伸夫・絵)の3冊がでて、長谷川慎子さんのこのシリーズは全 10巻が完結しました。

『ガンブ 魔法の島への扉』 (エヴァ・イボットソン・作 三辺律子・訳 1470円 偕成社)

9年に1度、9日間だけしか開かないのがガンブ、魔法の扉です。この扉は現在で

はロンドンと魔法の島をつなぐ唯一の通路



です。ある時、島の王子がロンドンで誘拐され、島に戻ってくる事が出来なくなりまして。9年後、王子を連れ

戻すため、王様に託されたのが年老いた魔法使いと、一つ目の巨人、植物を司る妖精に、ハグという魔女の一族の女の子です。この4人は王子さまを救出のためロンドンへむかったのですが・・・イギリスのファンタジー。

『光車よ、まわれ!』(天沢退二郎・文司修・絵 2835円 ブッキング)

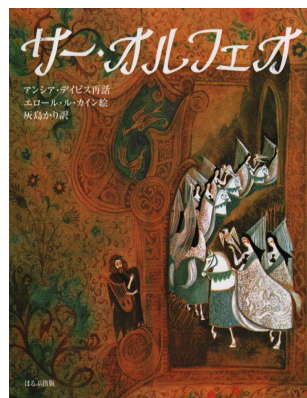


天沢退二郎は詩人であり、宮沢賢治の研究かとしても知られている。この本は彼の書いた子ども本の中で最初の本で、1973年に筑摩書房から出版されたが、長いこ

と品切れ(絶版?)になっていました。今度ブッキングから復刊されたものです。この他に天沢の幻のファンタジー作品といわれていた「三つの魔法」3部作「オレンジ党と黒い釜」「魔の沼」「オレンジ党、海へ」(いずれも税込み定価は2835円)が同じブッキングから復刊されました。本書は一朗という主人公が、ある日学校

という日常の場から突然闇の戦いにひき込まれていく場面から始まります・・・。

『サー、オルフェオ』(アンシア・デイビス・再話 エロール・ル・カイン・絵 灰島かり・訳 1365円 ほるぷ出版)



これは中世のイギリスの吟遊詩人たちが語り伝えた美しい愛の物語。サー・オルフェオという勇敢

で、豎琴の素晴らしく上手な王様が、美しい妃ヒュロディシと暮らしていました。ある日、妃は何者かに突然

連れ去られてしまったのです。サー・オルフェオは毟髪だけを持って妃をさがし・・・ギリシア神話オルフェウスを下敷きにケルトの伝承が加えられて、伝えられてきた愛の物語。愛する人へのクリスマスプレゼントに最適な絵本かもね。

『ヴィジュアル版 ガリヴァー旅行記』(ジヨナサン・スウィフト・原作 クリス・リデル・絵 原田範行・訳 3045円 岩波書店)

「ガリヴァー旅行記」と聞けば、「小人の国」思いうかべるほど、有名な物語なんだけど、ガリヴァーが旅行したのは「小人の国」だけじゃないんだよね、「大人国」へも「ラピューター・飛ぶ島」や「馬の国」

へもいつているんだよ。この本はスウィフト



トによって1726年にイギリスで出版されたのですが、作者は子ども本として書いたのではなく、当時の政治や経済・社会など人間の暮らしを批判や風刺をする目的で書いたのだそうです。しかし、この物語は出版当初より、大人だけでなく子どもからも喜ばれたのだそうです。本書はそのダイジェスト版です。ダイジェスト版とはいえとても良くまとめられていますし、ヴィジュアル版とうたっているように、リデルの絵もとても楽しいものになっています。

これを読んで、ものたりなかったり、もっと読みたいと思つたひとは福音館書店の完訳版の「ガリヴァー旅行記」(坂井晴彦・訳 2625円)の方も是非読んでください。2冊セットで、本好きの子へのプレゼントにいかがですか。

インフォメーション

* 12月11日(土) 2時からクリスマスお話し会 於けるピツポ

* 年末年始の休業は12月30日～1月3日まで。